

テキストチャットにおける(笑)の 社会語用論的機能

片 山 萌

1. はじめに

1.1 研究の目的

本研究は、Twitter のツイートに使用される「(笑)」を対象として、テキストチャットにおける「(笑)」の持つ「笑っている」という意味情報伝達以外の社会語用論的機能を明らかにすることを目的とする。ここでいう社会語用論 (sociopragmatics) とは、実際の発話文脈下での意味解釈の原理を探究する語用論のなかでも、とくに社会的なやりとりに着目したアプローチを指し (Leech 1983, 2014)、これまでの語用論研究においてはブラウン&レヴィンソン (1987/2011、以下 B&L) によって提唱された「ポライトネス理論 (politeness theory)」をはじめとする、ポライトネス (politeness) に関する研究がその主要な位置づけを担ってきた。滝浦 (2008) は、ポライトネスを「言語のもっぱら対人関係の確立や維持・調整に関わる働きのこと」とまとめている (p.3)。本稿では、「(笑)」がテキストコミュニケーションにおいてどのような語用論的働きかけを行っているのかを、実際の Twitter 上の「(笑)」を使用しているツイートをデータとして扱い、とりわけポライトネスストラテジーとしての機能に特化して分析する。「(笑)」の具体的な用法には、かなりのバリエーションが認められ、以下は本研究で扱う具体例の一部である。

- (1) a. 弟、無印で俺と色違いの服買ってきた笑 [#21]
b. 弟、無印で俺と色違いの服買ってきた
- (2) @p***** 謎だね一笑 うちの上司からは連絡来ないからな [#88]

(3) @y***** ワイも笑と w¹ は女の子には使わないようにしてる [#722]

(1a) は実際の本研究の集計でみられたツイートであり、(1b) はそのツイートから「(笑)」を消去したものである（例文の右端に [#n] の形式で表す番号は、本研究で扱ったコーパス内の通し番号である（以下同様））。この場合、文の意味的情報は変わらずとも、「(笑)」がある場合とない場合で、発信者の出来事に対しての感情的情報が異なる。(1) は「弟」が発信者と「色違いの服」を「買ってきた」という内容だが、(1a) は「(笑)」をつけることで、「弟」の行動を比較的軽く受け止めており、深く気にしていない様子がうかがえる。一方で「(笑)」を消去した (1b) では、発信者が不満であるという内容は書かれていないにも関わらず、発信者と「色違いの服」を買う「弟」の行動に対して不満や非難の態度を感じることができる。

つまり、「(笑)」があることで意味論的な内容付与ではなく、語用論的な内容付与の機能がなされているということである。この語用論的機能は2つあると考えられる。1つ目は、音声言語でのパラ言語的表現の補助である。高本（1993）は、文字言語では音声言語に付随するパラ言語特徴やプロソディー特徴などといった「言語表現の隠された意図を理解するための重要な手掛かり」（p.68）が「欠落」していることを指摘しており、実際に（1a）ではその「手掛かり」となるパラ言語的表現を「(笑)」が担っていると考えることができる。2つ目は、交話的機能（phatic function）である。交話的機能とは、ヤーコブソン（1973/2019）が提唱した6つの言語機能のうちの1つである。ヤーコブソンは、「発信者（addresser）」が「受信者（addressee）」に「メッセージ（message）」を送る言語伝達行動において、以下6つの言語機能があるとまとめている。それは、①発信者に焦点が合わせられる「心情的機能（emotive）」、②受信者に作用することを目標とした「動能的機能（conative function）」、③コンテキストへの方向付けの機能を担い、多くのメッセージの主要な存在である「関読的機能（referential）」、④発信者と受信者のメッセージの回路が接触しているかどうか確認するための「交話的機能（phatic function）」、⑤発信者および受信者が同じコードを使っているか否かを確認する必要がある場合に使用される「メタ言語機能（metalingual function）」、⑥メッ

1 「w」は、主にインターネット上でよく使われる「(笑)」の類似表現である。「(笑)」のローマ字表記（warai）を省略したもの。（参照：ニコニコ大百科（2003年5月13日編集）「wとは」
(<https://dic.nicovideo.jp/a/w>) 2020年11月13日閲覧）

セージそのものへの指向とし、メッセージを際立たせる「詩的機能 (poetic function)」である。これらのなかで交話的機能は、情報伝達というよりは相手との関係構築を指向するという意味で、「(笑)」の機能的特徴に対応すると考えられる。

(2) は、「だね」という終助詞を用いることで、会話の相手（受信者）と「謎だ」という理解を共有していることを示し、「(笑)」は共有の場面で使用されていることがわかる。本研究でも「(だ) ね」などの前提知識の共有を示すモダリティ表現と「(笑)」が共起する傾向があることが明らかとなった。この傾向は B&L のいうポジティブポライトネスストラテジーの側面として、ポライトネス理論の枠組みでは、受信者のポジティブフェイスの助長ないしフェイス侵害行為 (FTA) の軽減に関わるものと分析できる。「(笑)」は受信者・発信者のフェイスに作用する機能があると考えられ、本研究ではフェイスワークとポライトネス理論を基に 12 パターンの分類項目を作成する。まずは、①発信者と受信者のどちらのフェイスに作用しているかを分類したのち、②ネガティブフェイスとポジティブフェイスのポライトネスストラテジーとしていずれの機能を持つのかを下位分類する。本研究ではストラテジーのタイプとして、「助長」、「軽減」、「事前回避」の 3 つを設定するが (3.2.1 で詳しく述べる)、以下の分析から得られる主要な結論のひとつが、(2) にみられるような、受信者のポジティブフェイスに「助長」として作用する用法が「(笑)」の典型的な機能であるという点である（詳しくは 4.1 の議論を参照）。

また、(3) にみられるように、意図的に「(笑)」や類似表現を使用してコミュニケーションをとるか否かを判断している人もいる。この例からは、形式の使い分けが語用論的なニュアンスの表示を積極的に担いうること、そしてその戦略的な使用が確認される。つまり、「(笑)」の機能・効果においてメタ的な認識が存在し、発信者は「(笑)」や類似表現のメタ的な機能を戦略的に使い分けられていることが見受けられる。

このように「(笑)」は「笑っている」という意味とともに、いくつかの語用論的な機能を持ち合わせていると考えることができる。発信者は「(笑)」をテキストコミュニケーション上で使用することで、ただ「自分は笑っている」という情報伝達をするだけでなく、意図として語用論的な意味を文章に含ませていると考えられる。

1.2 「(笑)」について

本研究の分析対象である「(笑)」とは、原義的には文章中に表記することで「笑っている」という状態を表す表現である。「(笑)」は、表記方法についてバリエーションが

存在する。例えば (4) はカッコで括られている「(笑)」、(5) はカッコのない「笑」であるが、語用論的な機能自体については明らかな差はないものと見られる。したがって、本研究では、「(笑)」の表記バリエーションについては言及せず、漢字表記されているものを同一表現であると見做す。つまり、本研究は「(笑)」の表記上のバリエーションが持つ機能ではなく、「(笑)」自体の持つ社会語用論的機能に分析のフォーカスを当てる。なお、本稿の記述においてはカッコを省略しない「(笑)」に統一する。

(4) @m***** その気持ちわかります (笑) [#271]

(5) @3***** それな笑 こちらこそ!! [#188]

さらに、「わら」「ワラ」など漢字表記ではないもの、またインターネット上で類似表現とされる「w」や「草」などは、話し手が文章に含ませたい意味機能が「(笑)」と異なる、つまり、機能的に異なる形式と見做しうることから、本稿の直接的な研究対象から外すこととする。

1.3 論文の構成

本稿では、これまで Schnoebelen (2012) や三宅 (2005) など、比較的多くの先行研究で扱われてきた絵文字や顔文字の言語使用ではなく、「(笑)」の言語使用に着目し、実際の具体的なデータをもとに「(笑)」の有する、主として語用論的な意味について検証する。第2節では、社会語用論、特にポライトネスに関する先行研究を概観する。第3節では、第2節で取り上げた先行研究をもとに分析パラメータを設計し、データ分析を行う。第4節では、分析結果をもとに考察をし、「(笑)」の持つ社会語用論的機能についての議論をする。第5節では、本研究で明らかになった「(笑)」の社会語用論的機能をまとめて結論とする。

2. ポライトネスに関する先行研究

2.1 ポライトネスとは

我々は相手とコミュニケーションを行う際、「相手はどう思うか、自分はどう思われているか」などを意識しながら、ふるまい方を判断する。人間は、相手に「よく思われたいという欲求」と、相手に「煩わされたくないという欲求」を持ち合わせる。この欲求のことを「フェイス (face)」と呼ぶ。人々は互いに「表敬」と「品行」によってこ

のフェイスを自他ともに尊重し配慮し合い、これを「フェイス保持行為 (face-work)」と呼ぶ (滝浦 2008, p.11)。

人と人との言語的ふるまいをとらえるために、フェイスワークの中でも対人関係に特化した枠組みとして、B&L (1987/2011) は「ポライトネス理論」という考え方を提示した。B&L は、フェイスを人間の基本的な欲求ととらえ、「他者に受け入れられたい・よく思われたい」という欲求を「ポジティブ・フェイス」、「他者に踏み込まれたくない・煩わされたくない」という欲求を「ネガティブ・フェイス」と定義した (cf. *ibid.*, p. vii)。この2つの欲求は両立せず、他者に受け入れられるために相手に近づくとお互いの領域に踏み込んでしまうこととなり、逆にお互いから離れると他者と交わることができない。このような同じ相反する欲求を持った人間同士が対面するコミュニケーションの状況では、自分と相手のどの欲求にどのような配慮をするかが問題となる。この問題に対処し、対人関係の調節手段となる言語的ふるまいにおける配慮を「ポライトネス」という (滝浦 2008, pp.17-18)。

2.2 FTA について

言語を用いて相手に働きかける行動 (言語行為: speech act) には、不可避免的に相手や自分のフェイスを侵害してしまうものがあり、B&L は「フェイス侵害行為 (FTA: Face Threatening Act)」と呼んだ。例えば、相手に対して「良くない」と直接述べるような「非難」の行為は、あからさまに相手のポジティブフェイスを脅かす。あるいは、「依頼」の行為は、将来における相手の自由な時間・行為を一部制限するため、相手のネガティブフェイスを脅かす。同様に、「謝罪」では自分のポジティブフェイスを、「約束」では自分のネガティブフェイスを侵害する行為とされる (cf. *ibid.*, p.29)。滝浦は、ただ事実を述べているだけの発話であっても、話し手と聞き手の関係性や発話状況などで、語用論的に非難にも要求にもなるような語用論的事実があると指摘し、「そう考えると、ほとんどすべての言語行為は潜在的なフェイス・リスク (フェイス侵害の可能性) を持つ」と結論付けている (cf. *ibid.*, p.30)。

B&L は、FTA が引き起こす可能性のあるフェイス損害を和らげようとするために、「補償行為 (redressive action)」を用いて、相手の「フェイスを立てる (give face)」方策があるとした。つまり、話し手は聞き手のフェイスを脅かす意図を持っておらず、相手のフェイス欲求を理解し、自らもそれを達成したいと、直接的、あるいは間接的に示すことである。この補償行為は、ポジティブフェイスに向けたものと、ネガティブ

フェイスに向けたものがある (B&L 1987/2011, p.30)。ポライトネスは、欲求 (フェイス) を顧慮するストラテジーであり、FTA により脅かされる可能性のあるフェイスを立てる補償行為であるともいえる。円滑なコミュニケーションが行われるために人々はストラテジーを選択し、使用するといえる。

2.3 ポライトネスの分類

滝浦は、ポジティブポライトネスについて、「直接的表現と近接化的表現によって、相手との距離を縮め、相手とともに事柄に直接触れようとする、表現の共感性が特徴」(p.34) とまとめた。B&L はこのポジティブポライトネスのストラテジーを 15 の下位ストラテジーに分類している。表 1 は、B&L のポジティブポライトネスストラテジー下位分類を基に滝浦がまとめたストラテジー分類である (pp.34-36)。各項目内には、滝浦・B&L らの例を参考にした例文を添えた。ストラテジーとして特に関わりが深い箇所は下線を引いている (ポライトネスストラテジーの表に関して以下同様)。

表 1 ポジティブポライトネスストラテジー下位分類

	ポジティブポライトネスストラテジー
1	相手 (の関心・欲求・必要・所有物) に気づき・注意を向ける (Notice, attend to H (his interests, wants, needs, goods)) 「あ、髪切ったんだ！イメージ変わったね～」
2	(相手への興味・同意・共感を) 誇張する (Exaggerate (interest, approval, sympathy with H)) 「そうなんだ！すご～い！」
3	相手への関心をより強いものにする (Intensify interest to H) 相手もその場にいるかのような臨場感を与えるように話す (描写的現在)
4	内輪である標しを用いる (Use in-group identity markers) 「かおりん、おはよう！今日キリ教テストだよ！」
5	一致を求める (Seek agreement) ／一致しやすい無難な話題を提供する 「最近朝晩冷えるようになったね」
6	不一致を避ける (Avoid disagreement) ／不一致を際立たせず、一致する部分に同意する 「そういうときもあるよね」
7	共通基盤を仮定する・喚起する・主張する (Presuppose/raise/assert common ground) 「バーゲンとかあると、つい買いたくなる <u>じゃないですか</u> 。それでいつも買いすぎちゃって～」
8	冗談を言う (Joke) 「はい、 <u>300 万円</u> のおつりです」
9	相手の欲求についての知識と気遣いを主張、または仮定する (Assert or presuppose S's knowledge of and concern for H's wants) 「 <u>早く帰りたいんでしょう</u> ？それなら早く問題を解かないと」

10	申し出・約束をする (Offer, promise) 「その本持ってるよ、 <u>今度貸してあげようか?</u> 」
11	楽観視する (Be optimistic) 「返す本持ってくるの忘れちゃった。 <u>今度でもいいよね</u> 」
12	自分と相手の両者を行動に取り込む (Include both S and H in the activity) (医者が患者に向かって) 「しばらく様子を見ましょう」
13	理由を言う (または尋ねる) (Give (or ask for) reasons) 「パーティー行こうよ。 <u>絶対楽しいから!</u> 」
14	相互的であると見なす、または主張する (Assume or assert reciprocity) 「 <u>今度は私がおごるね</u> 」
15	(物・共感・理解・協力を) 相手に贈与する (Give gifts to H (goods, sympathy, understanding, cooperation)) 「 <u>時間できたから手伝うよ</u> 」

さらに滝浦は、ネガティブポライトネスについて、「相手の領域に踏み込むことや直接名指すことを避け、遠隔化的表現と間接的表現によって、相手を遠くに置き、事柄に直接触れないようにする、表現の敬避性を特徴とする」(p.39) とまとめた。B&Lはこのネガティブポライトネスのストラテジーを10の下位ストラテジーに分類している。表2は、B&Lのネガティブポライトネスストラテジー下位分類を基に滝浦がまとめたストラテジー分類である (pp.40-41)。

表2 ネガティブポライトネスストラテジー下位分類

	ネガティブポライトネスストラテジー
1	慣習的な間接性に訴える (Be conventionally indirect) 「 <u>ご連絡いただければと思います</u> 」
2	質問する・曖昧化する (Question, hedge) 「ちょっと無理かもしれない」
3	悲観視する (Be pessimistic) 「お願いしたいんだけど、 <u>今日は無理そうかな?</u> 」
4	負荷 (Rx) を最小化する (Minimize the imposition, Rx) 「 <u>ほんの一分だけ</u> でいいので話を聞いてください」
5	敬意を示す (Give deference) 「どうぞ召し上がれ」
6	謝罪する (Apologize) 「お忙しいところ恐縮ですが…」
7	自分と相手を非人称化・非個人化・非人格化する (Impersonalize S and H) 「コップ、 <u>壊れちゃったんだね</u> 」
8	FTA を一般則として述べる (State the FTA as a general rule) 「事前にご予約いただくことになっておりまして…」
9	名詞化する (Nominalize) 「(“とても嬉しい” の意味で) <u>望外の喜びです</u> 」
10	自分が借りを負うこと・相手に借りを負わせないことを明言する (Go on record as incurring a debt, or as not indebting H) 「 <u>どうかお納めください</u> 」

ネガティブポライトネスはFTAにより侵害されるフェイス欲求の補償であるが、ポジティブポライトネスは必ずしも常にそうとは限らない。つまり、ネガティブポライトネスにおける補償行為は相手に与える負荷自体を対象とするのに対し、ポジティブポライトネスにおける補償は、一般的に他者の欲求を認めたり、自他の欲求の類似性に言及したり、相手の願望を満たすというような行為も含まれると B&L は述べている (B&L 1987/2011, p.134)。

FTA によりフェイス侵害へのリスクが高すぎる場合、意図伝達自体を行わない・行為回避 (don't do the FTA) という選択もできる。あるいは、フェイス侵害リスクが高いとされるあからさまな直言 (bald-on-record) であっても、緊急時に効率よく情報伝達を行うことが求められる状況などではそのストラテジーを選択する場合がある。また、ネガティブポライトネスの一つとして、冗長さや曖昧さによってかえって相手に負担をかけてしまうことを避け、すぐに要点を伝えることがその負担を最小限にすると考えられ、あえてあからさまに言う場合もある。FTA でフェイス侵害にかかるリスクは、話し手と聞き手の社会的距離や、聞き手の話し手に対する力、特定の文化内における行為の負荷度によって異なる (B&L 1987/2011、滝浦 2008)。

事柄を明示的に伝達するよりも、相手と自分のフェイス侵害を避けることを優先として、直接的な言及を回避するストラテジーが「ほのめかし (off record)」である。皮肉や比喩、遠回しな表現を用いることで相手に自分の意図を察しさせ、直接的な FTA を回避する。滝浦は「ほのめかし」のストラテジーを行う動機について、「フェイス・リスクの回避以外にも、自尊心 (「品行」)、責任回避、あるいはレトリック的な発話効果への期待といったものが考えられ、フェイス・リスクの観点だけでは説明しきれない部分が残る」(p.42) と指摘している。表 3 は、B&L の考えを基に滝浦がまとめた「ほのめかし」のストラテジーの 15 の下位分類である。

表 3 ほのめかしのストラテジー下位分類

	ほのめかしのストラテジー
1	(動機や条件を) 暗示する (Give hints) 「今日は暑いから喉が渇くね」(→ “ビールでも飲みに行きたいな”)
2	話の水を向ける (Give association clues) 「うち、この近くなの」(→ “ちょっと寄っていかない?”)
3	前提に語らせる (Presuppose) 「今日もまた皿洗い当番だ!」(→ “やらずに楽をしている人がある!”)

4	少なく語る (Understate) (今の気分を尋ねられて)「べつに」(→“話したいことはない”)
5	余計に語る (Overstate) (近くの飲食店を尋ねられて)「角にあるけど、この辺の人はあまり行かないね」(→“まずいからやめておけ”)
6	同語反復を用いる (Use tautologies) 「カップ麺はカップ麺だよ」(→“たかが知れている”)
7	矛盾したことを言う (Use contradiction) 「美味しいような、まずいような」(→“なんとも言い難い”)
8	皮肉を言う (Be ironic) 「おうち時間しかなくて最高!」(→“外出自粛で自宅待機するしかない”)
9	比喩を用いる (Use metaphors) 「王子様探すのも大変」(→“高望みの結婚相手”)
10	修辭疑問文を用いる (Use rhetorical questions) 「私が悪いのかな?」(→“悪いのはそっちじゃないの?”)
11	多義的に言う (Be ambiguous) 「あの人、AB型だから」(→“変わり者か天才肌のどちらかだ”)
12	あいまいに言う (Be vague) 「誰かさんが寝ているからな〜」(→“あなたが起きてやるべき”)
13	過剰に一般化する (Over-generalize) 「安物買いの銭失いってことね」(→“結局は損をしているから考えなさい”)
14	聞き手を他人に置き換える (Displace H) 「誰かそこの醤油取れる人いる?」(→“近くのあなた取って”)
15	言いさしでやめる、省略する (Be incomplete, use ellipsis) 「あ、マスク……」(→“マスクを付け忘れてますよ”)

各ポライトネスとストラテジーがどのように本研究のパラメータに関わるかを記述する。フェイスワーク（ここでは主にポライトネスのことを指す）は、円滑なコミュニケーションとなるように配慮し、自他のフェイスを立てる（保持する）役割があるため、「(笑)」の持つ社会語用論的機能と関係が深いと考えられる。特に、滝浦の考えに沿い、「ほとんどすべての言語行為は潜在的なフェイス・リスク（フェイス侵害の可能性）を持つ」(p.30) と考えるならば、「(笑)」の存在により FTA を行う／回避する可能性があると考えられる。従って、「(笑)」の存在が、相手／自分のポジティブ／ネガティブフェイスにどのような働きかけをするのかという点と、その際に「(笑)」が発信者によりどのような期待を込められ、どのフェイスに配慮したストラテジーとして使用されるのかという点で、ポライトネス理論は「(笑)」の社会語用論的機能を探るパラメータの一種となる。日常会話の中では最後まで言い切らずに、相手に察してもらうこ

とで円滑なコミュニケーションを行う場合が多いと考えられるため、「ほのめかし」の戦略もパラメータに含む。

3. 調査

3.1 データについて

3.1.1 データ収集

「(笑)」の社会語用論的機能を研究するためのデータとして、Twitter 上で公開されているツイートを集計し、分析する。まず、鳥海 (2015) が開発した Twitter 上のツイートをデータとして収集できる WEB アプリケーション (Web Tweet Crawler、以下 WTC) を用いて、データ収集を行う。任意の検索文字列を Twitter API を利用して Twitter 上で検索し、文字列を含む公開ツイートを CSV 形式でダウンロードすることができ、ブラウザ上で扱うことができる (鳥海 2015, p.57)。

本研究では、「(笑)」がカッコのない「笑」としても表記される事情を考慮し、キーワードを「笑」として検索を行い、1500 ツイートをデータとして収集する。WTC で得られた情報のうち、「Tweet 本文」のみをデータとして扱い、それ以外の情報は削除する。Twitter は一種の匿名的な性質をもっているため、ユーザーアカウントが特定できたとしてもアカウント所有者についての情報 (年齢、性別など) は得られず、「(笑)」を使用する者の特徴・傾向を考えるまでの必要な情報が得られないため、対象から外す。

次に、「Tweet 本文」のデータのみを表計算ソフトであるエクセルで扱い、3.2 で説明するパラメータごとに分類を行い、分析する。収集されたツイートの中には、「(笑)」が使用される文が2つ以上記入されているものがあり、それらは「(笑)」が使用されている文の数だけエクセルの表内でコピー & ペーストを行い、「(笑)」が使用される順番に一つずつ数を振り分け、機能についての分類、分析を行う。

本来のツイート本文では、絵文字や写真が表示されている可能性があるが、エクセル上でデータを扱うにあたり機種依存した絵文字や写真を表示することができなかったため、絵文字などの使用については本研究の対象外とする。

3.1.2 分析対象データ内容

分析対象データの内容は以下の通りである。

データ収集日時：2020 年 9 月 22 日 0 時 34 分

対象データ総数：日本語で表記された 1373 ツイート

対象データ数：リプライ（返信）985 ツイート、ひとりごと 388 ツイート

対象「(笑)」の登場文数：1508 件

3.1.1 で既述の通り、WTC ではツイートユーザーの特定ができたとしても、ユーザーのパーソナルな情報まで得られないため、「(笑)」の使用者にまつわる分析は対象外とする。ビッグデータをもとにテキストチャットにおける「(笑)」の社会語用論的機能の一般的な傾向を得ることを目指す。

WTC で検索して得られた Twitter に公開されている 1500 ツイートのうち、日本語で書かれたツイートを対象とした。日本語以外の言語で記述されているツイート、「(笑)」の直前の語がタイプミスか何かで語彙として認識できないツイート、過剰に卑猥なツイート、他の SNS や配信アプリの自動連動ツイートとして発信者が書き込んだものと判断できないツイートは、コンテキスト上の「(笑)」の社会語用論的機能についての分類判断が行えないものとみなし、分析対象から外す。収集した 1500 ツイートのうち、これら対象外のツイートを除いて、1373 ツイートを分析対象とする。

ユーザー ID などの情報は対象から外すが、ツイート本文中に記述されるユーザー ID については、その情報も含めてテキストとして扱うこととし、削除しない。なお、本稿中に例としてデータ内からテキストを持ち出す場合は、匿名性を守るためにユーザー ID のアットマーク (@) に続く二文字目以下を記号 5 つでぼかす。また、発信されたツイートを「テキスト」と呼び、ツイートの中で意味的なまとまりをもち、顔文字・絵文字・記号や句点、空白などで区切ることのできる単位を「1 文」と呼ぶ。リプライと対比させるために、宛先のないツイートのことを「ひとりごと」と表す。

3.2 「(笑)」が表現すると考えられる機能の分類

本項では、「(笑)」の「笑っている」という情報伝達以外の機能、すなわち社会語用論的機能を探るために、先行研究を基に立てた分類パラメータについて解説する。パラメータは大きく分けて 2 つ設計し、ポライトネスの観点と、「(笑)」の出現形式の観点から分類を行う。

3.2.1 パラメータ I：ポライトネスストラテジー

1 つ目は、「(笑)」のポライトネスストラテジーとしての使用を考えるパラメータで

ある。ヤーコブソン（1973/2019）の「交話的機能」は会話の接触確認を行い、会話を維持するための機能であり、円滑な会話を行うための前提機能として考えられる。ポライトネスストラテジーは、会話の接触が正常であることが前提とされる状況下で、円滑なコミュニケーションのための戦略として用いられる。つまり、交話的機能としての戦略がポライトネスストラテジーの使用であると考えることができ、本研究では、会話維持のための具体的なポライトネスストラテジーを確認するパラメータを設ける。2.1で言及した通り、ポライトネスとは、コミュニケーション上の他者との関係性に関する概念であることから、厳密には話し相手（受信者）のフェイスへの侵害を最小限に抑える言語的配慮のふるまいのみを指し、発信者のフェイスに作用する行為を含まないことが一般的である（2.3を参照）。しかし、以下で見るように、「(笑)」の機能には、発信者自身のフェイスワークに関与する側面が多くあることが示唆されることから、本研究ではフェイスワーク全体を射程に入れた分析を行う。

ここでは、第2節で指摘されていた滝浦（2008）の考えに従い、「(笑)」が生起しているすべての文がFTAを起こしているとみなし、「(笑)」が表記されることで文が脅かしている対象フェイスにどのような働きかけを行っているのかを考える。まずは、① FTAの対象とされうるフェイスをテキストから判断し、「(笑)」によってどのようなFTA回避のストラテジーが行われているのかを分析する。ここでは、まず i) 発信者（sender）と受信者（receiver）の立場に分け、「(笑)」が表記されている文のFTAが ii) ポジティブ（positive）あるいはネガティブ（negative）のどちらのフェイスを脅かしているのかについて分類する。すなわちこれによって、「(笑)」によって回避する対象となるフェイスは、1) 発信者のポジティブフェイス（sender's positive face, SPと略、以下同様）、2) 発信者のネガティブフェイス（SN）、3) 受信者のポジティブフェイス（RP）、4) 受信者のネガティブ・フェイス（RN）の4タイプに分類される。また、「(笑)」の存在が文のFTAに効果的に働きかけている場合、そのふるまいを、「助長」、「軽減」、「事前回避」の3つに分類する。

「助長」は、すでに文の内容があるフェイスに貢献している文章に「(笑)」を付けることで更に一步そのフェイスに歩み寄るという語用論的ふるまいを指す。脅かしていることを助長するものではない。「軽減」は、文の内容があるフェイスを脅かしているものであり、「(笑)」をつけることでFTAのリスクを解消しようとするふるまいを指す。ネガティブポライトネスストラテジーの使用として最も理解されやすい解釈だろう。「事前回避」は、文の内容があるフェイスを脅かしているものの、実はあえてそのフェ

イスを自分で先に脅かすことで、後から他者によってそのフェイスを脅かされることを避け、そのフェイスを守ることを意図するふるまいを指す。特に自虐のように、自らの行いに対して自ら責めることで、相手から責められることを防ぐ働きが例として挙げられる。また、「事前回避」には、あえて文章でそのフェイスを先回りして脅かすことにより、「自身の行いを顧みて客観視できる理性的な自身のアピール」という効果が生じうることから、そのアピールにより、「自身の行いについて理解しているため、これ以上自分の領域に踏み込まないでほしい」というネガティブフェイス、「理性的な自分として受け入れられたい」というポジティブフェイスの表明につながると考えられる。以上の3つのふるまいは、例えばFTAを「健康リスク」と見立てたメタファーを通して解釈すれば理解しやすいかもしれない。すなわち「病にかからないように健康増進させること」が「助長」であり、「病気に対する直接的な治療」が「軽減」であり、「大病にかからないようにワクチン（少量の病原体）を打つ」という予防的な働きが「事前回避」である。

FTAの対象フェイスと、そのフェイスへの効果を分類した後、②FTAの補償行為として「(笑)」はどのボライトネスストラテジーとして使用されているかを、第2節で挙げたB&L(1987/2011)のポジティブ／ネガティブボライトネスストラテジーの下位分類と、ほのめかしの下位分類に従って分析する。ただし、ポジティブ／ネガティブボライトネスストラテジーの下位分類を優先的に考え、ほのめかしストラテジーが顕著な場合に限ってほのめかしのストラテジーとして分類した。

ポジティブ／ネガティブボライトネスストラテジーの下位分類は、それぞれ表1、2をそのまま利用した。ほのめかしのストラテジーは、ポジティブ／ネガティブボライトネスストラテジーとの重複を避け、「暗示する」「前提に語らせる」「少なく語る」「同語反復を用いる」「矛盾したことを言う」「皮肉を言う」「比喩を用いる」「多義的に言う」「曖昧に言う」「言いさしでやめる、省略する」のストラテジーをパラメータとして採用した。分類を行うにあたり、ポジティブボライトネス、ネガティブボライトネス、ほのめかしの順に1から35までの通し番号を割り当てた。それぞれのボライトネスストラテジーの順番は表1、2、3の通りである。

3.2.2 パラメータⅡ：出現形式

大きく分けた2つ目のパラメータは、さらに細かく3つに分けて分類をする。

1つ目のパラメータとして、「(笑)」がGiles & Oxford(1970)の7つの笑い分類の

どの種類に該当するかを検討する。ヤーコブソン（1973/2019）の6つの言語機能のうち、「(笑)」はテキスト上で発信者の感情表出を色づける機能として「心情的機能」を担うと考えられる。さらに細かく、どのような笑いを表現しているのかを、コンテキストに従って分類する。ここで分類する笑いの種類は、「滑稽笑い」、「社会的笑い」、「無知の笑い」、「不安笑い」、「嘲笑」、「弁解の笑い」の6つである。「楽しい・面白い・嬉しい」など直接感情表出の語彙と共に起される「(笑)」は、現実世界で送信者の顔が笑っていないとしても、「滑稽笑い」と分類した。

2つ目のパラメータは、言語形式との対応である。「(笑)」が表記されている文の終助詞をパラメータに従い、形式的に分類する。ここでは日本語記述文法研究会（2003）が挙げる言語形式（モダリティ）と、滝浦（2008）が挙げる「よ」と「ね」の意味素性を参考に作成した表4の分類項目に従う。分類手順としては、まず終助詞の有無に注目し、終助詞がない言い切りの文末は（a）と分類する。終助詞があるものは、表4の「主な文末形式」に従い、それぞれの項目に分類する。テキストの文末表現が「主な文末形式」と異なる場合は、文脈判断を行い、意味機能ごとに分類を行う。

表4 パラメータ：言語形式との対応

	基準：終助詞	主な文末形式
a	終助詞なし・叙述	_#
b	話し手の管理下にある情報を主張する伝達態度	_ よ #
c	聞き手の管理下に置かれると見做す情報を主張する伝達態度	_ ね #
d	確認要求の伝達態度	_ かい (?) #
e	疑問	_ か (な) ?#
f	勧誘	_ しましょう #
g	行動要求・命令・提案・依頼	_ して (ください) #
h	感嘆	_ (!に相当する) #
i	推量・蓋然性	_ かも #
j	推定・伝聞	_ だって #
k	説明	_ んだ #
l	納得、不納得	i. _ か # (納得) ii. _ のに # (不納得)
m	言いさし	_ だけど #

最後に、談話標識としての機能についてパラメータを立てる。ここでは、三宅(2005)が提示する絵文字記号が持つ談話標識としての機能を参考にする。一つのツイートを発信者の発話と捉えたときに、テキスト内でどのような談話構造が見られ、その標識として「(笑)」が機能しているのかを調べる。談話構造の標識という以上、「(笑)」の有無に関わらず、テキスト内に2文以上記述されているツイートを対象にする。ここでは、「(笑)」がテキスト内でどの位置に表記されているかで判別する。①1文目の文末、②文頭、③最終文の文末の3つの位置ごとに分類する。すでに三宅により、「(笑)」を含む絵記号類は、ポーズ、あいづち、トピック転換として機能していることが指摘されているため、本研究では新たに「(笑)」がそれ以外の談話標識としての機能をもつのかを検討する。

3.3 分析結果：ポライトネス戦略としての側面に焦点を当てて

本項では、パラメータごとに分けて分析した結果のうち、ポライトネス戦略としての結果を取り上げて述べる。

図1は、FTAの対象フェイスと、「(笑)」の存在がどのような効果を持つのかを分類し、まとめたものである。

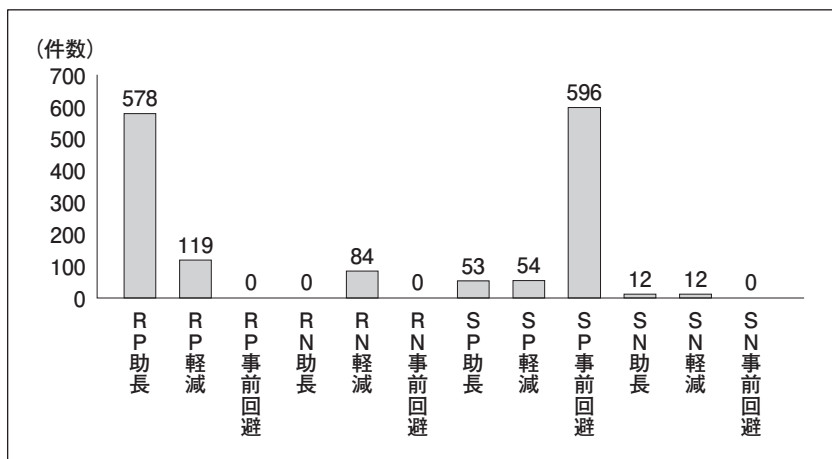


図1 FTA 対象フェイスとその効果

まず明らかに示されていることは、ポジティブフェイスへの働きかけとして「(笑)」が使用されやすいことである。特に、(6)のような受信者への好意的な内容の地の文に「ポジティブポライトネス」を助長するような形で使用される「RP (Receiver's Positive face) 助長」と、(7)のような送信者が自分の発言を批判されることを避けるために、事前に地の文で自らによってポジティブフェイスを脅かし、「(笑)」をつけることで理性的な自分をアピールして先回りして送信者のポジティブフェイスを守る形で使用される「SP (Sender's Positive face) 事前回避」が非常に多くみられた。

(6) @f***** めっちゃいいすね笑 俺も使いますわ [#132]

(7) ばく「優良物件」じゃないですか？(笑) [#1047]

本研究内でのポライトネストラテジーは受信者のフェイスに対する配慮だけではなく、発信者自身のフェイスに作用する行為も含めて分類しているため、必ずしも一つの機能だけを持つのではなく、複数の機能を兼ね備えており、特に分類に悩むような例はより効果がみられる機能を取り上げて分類する。「RP 助長」は、受信者へのポジティブポライトネスを助長しているようで、発信者自身の「相手に気に入られたい」というようなポジティブフェイスを満たすための行為（SP 助長）としても見ることができる。ここでは区別をつけるために、「SP 助長」は、「自分の長所などを自ら主張するもの」として、より自身のポジティブフェイスを満たそうとする意志が強いものを分類する。

また、「RN 助長」「RN 事前回避」のデータがないことから、相手のネガティブフェイスに貢献するような言語行為は行われにくいということが分かる。相手への発言を行う上で、相手の領域に踏み込む必要があり、相手のネガティブフェイスを最も傷つけない方法は、語りかけを行わないことである。語りかけを行う上で、受信者の領域に踏み込む度合い（リスク）をどれぐらい下げられるかが、発信者が唯一できる方策であり、それが「RN 軽減」の件数が多く確認できた要因であろう。

「RP 事前回避」は、一度相手のポジティブフェイスを傷つける必要があり、それ以上大きな傷を負わずに済むような予防的な対策であるが、傷をつけること自体が望まれない行為であり、よほど親密で信頼がある仲間内でしか行えない非常に高度な行為であろう。

「SN 事前回避」のデータがないことは、例えば相手に自分のネガティブフェイスが脅かされる「依頼」をされる前に、自分から先にネガティブフェイスを脅かす「申し

出」を行うことは、相手のポジティブフェイスへの働きかけとなり、自分のネガティブフェイスを守ることができないことがその要因となるだろう。

ポライトネスストラテジーとしての「(笑)」の機能で最も多く使用されていたのは、ネガティブポライトネスストラテジーの「質問する、曖昧化する」であり、214 件確認された。次に多かったのは、ポジティブポライトネスストラテジーの「共通基盤を仮定・喚起・主張する」であり、167 件確認された。全体を通してみると、ポジティブポライトネスストラテジーの使用が 864 件、ネガティブポライトネスストラテジーの使用が 502 件と、ポジティブポライトネスストラテジーの方が多く使用されていた。ポジティブポライトネスストラテジーの方が、5 項目多いが、それを考慮したとしても、やはりポジティブポライトネスストラテジーとしての「(笑)」の使用が多いと判断できる。

4. 議論

本節では、今までの先行研究と本稿の調査結果をもとに、「(笑)」のもつ社会語用論的機能、つまり、「笑っている」という情報以外のものを伝達する機能についての議論を行う。まず、高本（1993）が顔文字のもつ語用論的機能として提示する「①コンテキストへの方向づけ」、「②相手の体面を調整・維持」、「③自己の体面を調整・維持する」機能に沿って、「(笑)」の機能を検討する。喜怒哀楽、様々な感情をもつ顔文字に対して、「(笑)」は「笑う」という感情しかもたないため、「(笑)」が存在する時点でコンテキストへの方向付け、つまり文脈理解へ示唆は行えていると考えられる。そのため、本稿での議論の対象外とし、「②相手の体面を調整・維持する機能」、「③自己の体面を調整・維持する」を基に議論する。本稿では、特にポライトネスと「(笑)」の関係が深いと考え、4.1 ではポジティブポライトネスストラテジーとしての機能、4.2 ではネガティブポライトネスストラテジーとしての機能について結果を基に議論する。4.3 では、新たなストラテジーとして、発信者自身のポジティブフェイスを守り、アピールする機能について考える。4.4 では、主に文中に現れる「(笑)」をもとに、共通基盤をもつ仲間として主張できる使用例から、仲間意識の表明としての機能を議論する。4.5 では、三宅（2005）の携帯メールでは談話構造があるという指摘をもとに、「(笑)」のもつ談話標識としての機能が自然な会話となるような流れを生み出していることを議論する。最後に、4.6 では、これまでの議論をもとに、絵文字と記号、そして「(笑)」のテキストチャット上での機能的差異について考える。

4.1 ポジティブポライトネスストラテジー

ポライトネスストラテジーの観点、笑いの下位分類、言語形式の観点から、「(笑)」はポジティブポライトネスストラテジーとの親和性が高いことが分かった。特に、「長所を伸ばす」ように、地の文のポジティブな側面を「(笑)」が後押しすることで、ポジティブな働きかけをさらに強める機能があると言える。具体的に、受信者への働きかけ、発信者自身への働きかけの2つの観点からその機能について考察する。

まず、受信者への働きかけについて、キーワードは「尊重」だと考える。ポライトネスストラテジーの観点では、「RP 助長」が全体の38%を占めていたことから、相手のポジティブフェイスを直接満たす、あるいは、相手のポジティブフェイスに共感するような働きかけが強いことがわかった。直接的な面白さによって引き起こされる笑いである「滑稽笑い」は、自分が笑っている様子を表出する一方で、リプライにおいては、相手の発言や出来事が面白いという意味も表出し、相手のポジティブフェイスを満たす働きも確認された。さらに、相手とのコミュニケーション内で登場する「社会的笑い」が「RP 助長」の約67%を占めており、「(笑)」はコミュニケーションの中で、相手のポジティブフェイスを重視し、尊重することで円滑なコミュニケーションに貢献する役割を果たしている。批判のような、相手のポジティブフェイスを脅かす言動には「(笑)」をつけることで効力を弱めているデータも確認されたが、その内容は直接受信者への批判ではなく、共通の知り合いや芸能人などの第三者を対象にした批判であった。受信者を直接脅かすような関係性に悪い影響を与えそうな危険な行為は避け、インターネット上での言い争いに発展しないように努めている、もしくは、インターネット上で表情の見えない相手と言い争いを起こす野蛮な人物ではなく、理性的な人物として自己アピールを行っているとも考えられる。

あえてFTAを起こすことで相手のポジティブフェイスに働きかけをするケースもある。特にこれは、相手のネガティブフェイスを脅かすパーソナルな質問や依頼、提案に多く見られた。ただ依頼をするのではなく、「(笑)」を付けることで冗談として頼んでいる様子や、会話の軽さを演出しているように考えられる。ただ、そのFTAの補償行為をことばとして表さず、「(笑)」を付与することだけで補償行為として扱っているものも見られ、このように直接「(笑)」を補償行為とすることは、相手との関係性によっては危険でありうる。文章中に補償行為を明記しないことで、受信者にその意図が伝わらず、「(笑)」がただの笑いとして受け取られ、「ヘラヘラしながら依頼をしてくるような図々しい人」と誤解される恐れもある。

発信者自身のポジティブフェイスをアピールするような「SP 助長」も確認できたが、非常に少なく、発信者自身のポジティブフェイスを直接的に助長するような場合に「(笑)」は使われにくい。

滝浦（2008）が潜在的なポジティブポライトネスを持つと指摘する「(b) よ」と「(c) ね」の言語形式も、受信者のポジティブフェイスに働きかける場合は 247 件、発信者のポジティブフェイスに働きかける場合は 114 件と、倍以上の差が見られた。ポジティブポライトネスストラテジーとしての使用は、特に受信者に向けた配慮という側面が強く、お互いに「相手」を尊重することで有効的な関係性維持に貢献しているであろう。

4.2 ネガティブポライトネスストラテジー

ネガティブフェイスへの働きかけとして「(笑)」が使用されているデータも確認された。(8) は「写メ」を待っていることを受信者に伝えることで、受信者は「写メ」を送らなくてはならず、間接的な依頼行為として、受信者のネガティブフェイスを脅かす文であり、その負荷を軽減させるために「(笑)」を使用している。このように、ネガティブフェイスを脅かすリスク軽減の役割として「(笑)」の効果を確認できた。

(8) @m***** 秋だねえ 写メ待ってるよ笑 [#1108]

ただし、その使用数は対象を受信者・発信者と合わせても、26 件であり、ポジティブフェイスへの働きかけの使用数と比較すると、極めて少なく、使われにくいことがわかった。さらに、その中でも、形式上ネガティブフェイスを脅かしているといえども、(8) のように、相手に期待することがある種の相手のポジティブフェイスへの歩み寄りとも読み取れ、ネガティブフェイスへのリスク軽減と合わせて、ポジティブフェイス助長の効果を持つとも考えることができる。ネガティブフェイスを助長する、つまり距離を取るために使用する意味だけを持つ「(笑)」の使用データは検出されなかった。

また、ネガティブポライトネスストラテジーが選択されている場合でも、その多くはポジティブフェイスに働きかけるものであった。さらに、文末表現の言語形式では、発言の内容や責任を曖昧化する「(m) いいさし」の使用が多く確認されたが、そのうちの約 95% がポジティブフェイスに作用するものであった。

以上のことから、発信者自身から受信者との距離を取ることや、受信者のテリトリー

を侵害する度合いを軽減するようなネガティブフェイスへの効果はないとは言えないが、Twitter のデータにおいては、直接的なネガティブフェイスへの効果は極めて少なく、「(笑)」はネガティブポライトネスストラテジーとの親和性が低いといえる。

4.3 自己の体面を守る

ポライトネスストラテジーとして最も多く検出されたものは、「SP 事前回避」、つまり、発信者自身のポジティブフェイスを事前に自らによって脅かすことで、他者からの侵害を防ぎ、結果として自身のポジティブフェイスを守るような自己防衛の効果である。B&L (1987/2011) は、ポライトネスストラテジーが相手のフェイスを満たすために歩み寄る、もしくは、侵害するリスクを下げることで FTA の補償行為となり、円滑なコミュニケーションを築く機能であると述べている。しかし、本研究で得られたデータからは、自らを傷つけ、あえてリスクを最上値に引き上げることで、それ以上の侵害を避けるという、間接的なリスク回避行動としての「事前回避」が頻繁に生じていることが明らかになった。相手への配慮が重視され、相手と自分の関係性維持を目的とするポライトネスストラテジーが、自己の体面を守ることに重視した使用がされていたのだ。

特に、「SP 事前回避」は「弁解笑い」と共起する例が多く観察され、そのような例においては、(9) のように自分で自分の発言にツッコミをいれるような「セルフツッコミ」や、「自虐」としての機能が確認される。自虐などに含まれる言い訳のようなネガティブ要素を、ポジティブポライトネスとの親和性が高い「(笑)」を付けることで、ネガティブ要素を隠し、あえてそれを基にポジティブな話のきっかけにしていると考えられる。

(9) @n***** あれ名前変わったよ何か忘れたけど笑笑 [#139]

さらに、言語形式では「(m) いいさし」に分類されている 131 件のうち、62 件が「SP 事前回避」であり、「弁解笑い」であった。さらに「ネガティブポライトネスストラテジー」のフィルターをかけると、44 件確認できた。4 つのフィルターをかけても件数が多いことは、「SP 事前回避」は断言を避け、発言の効力を弱めるような言いさしの形として使われており、自分の発言を相手に押し付けたくないような配慮、そして、自分の発言への責任を軽くしようとする機能があると言えるだろう。また、ネガティブポライ

トネストラテジーの「質問する、曖昧化する」に分類されるデータのうち約64%が「SP 事前回避」であり、曖昧化することで断言を避ける傾向がここでも確認できる。

このような「SP 事前回避」は、自己アピールとして作用することも、相手への配慮として作用することもできるだろう。例えば、(9)では、「名前」が「変わった」ことを受信者に教えており、ここで発信者のターンを終えてしまうと、受信者から「どんな名前？」と尋ねられた際に答えられず、発信者のポジティブフェイスが脅かされることになるだろう。そのため、先に「何か忘れたけど」と自身の情報を提示し、相手に教えておきながら自分は知らないという発信者自身のポジティブフェイスを脅かすような、自分にとって不利な状況を誤魔化すために「(笑)」を使用し、自分で自分の発言が矛盾していることに気づいており、そのような状況を「笑っている」とアピールするのだ。ここで「(笑)」を付けることで、《自らの行いを客観視できる理性的な自分》として、ポジティブフェイスを受信者にアピールすることができる。さらに、「矛盾していることは自分で理解している」という意味も与え、相手に対して「自分で理解しているのでこれ以上私に指摘しないでほしい」というような自身のネガティブフェイスを助長しているとも考えることができる。また、自虐的な発言をしたのちに自身で自己の体面を守ることで、受信者が発信者のフェイスを気遣い、フォローをするようなふるまいをせずに済み、受信者の手間を省き、それ自体が相手への働きかけとなることも考えられなくはない。

この「事前回避」の機能は、発信者自身への効果を持ち、受信者に向けて「事前回避」を行うことはできない。それは、受信者のポジティブフェイスを脅かさないために先に脅かすということは本末転倒な行為であり、仮に発信者と受信者が固い絆で結ばれていたとしても、非常にリスクの高い行為であるため、わざわざそのような危険な行為を取るメリットがないことが要因だろう。発信者自身にのみ使用でき、遠回しながらも自己の体面を守りながら、相手に意見を押し付けけないなどの配慮も行いうる特殊な機能である。

「(笑)」は「弁解笑い」や「いいさし」、「質問する・曖昧化する」として分類されやすく、それは自己の体面を守る機能を働かせることがわかった。では、なぜ自己の体面を守るうえで、発言を曖昧化させ、発言力を弱めるような伝え方や、「事前回避」というような遠回しな伝え方をするのだろうか。それは、このコミュニケーションがテキストチャット上で行われていることが理由として考えられる。テキストチャットでは表情が見えないために、物事に対する温度差から生じる言い争いが起こらぬよう配慮するこ

とは高本（1993）ですでに指摘されているが、なぜ発言の効力を弱める言い方を使用するのは記述されていない。これは、テキストチャットでは、自身の発言が記録され、文字として残ることが要因ではないだろうか。記録の残らない音声言語での会話では、大抵の場合は、内容は覚えていたとしてもどのような言い方をしたのかまでは覚えていない。また、もし相手を傷つけることを言ったとしてもその場で取り繕うことができる。しかし、テキストチャットでは、発信したものが自身の発言として記録され、消去しない限り後から見直すことも、（公開されているやり取りであれば）第三者が見ることもできる。そのような場面で誤解されることを避け、自身が負う責任・負荷を軽減し、相手に意見を押し付けないように、断言を避ける形式や、「(笑)」を付けることで発言の効力を弱めているのだと考える。

4.4 仲間意識の表明

4.3 までで挙げてきた機能は、全て文末に現れる「(笑)」についてである。本コーパスでは、文中に出現する「(笑)」は、文末に使用されるものとは違い、「(笑)」を付けることでことばを強調させ、そのことばに含みを持たせ、意味が分かる者同士の仲間意識の表明として機能していると考えられる。これは、(10) のように、文中のあることばの直後に「(笑)」を使用することで、受信者に向けて暗号めいたメッセージを送るのだ。他者から見れば、なぜ「おじいちゃん」が面白いのかが分からない。しかし、発信者と受信者には、この面白さが分かり、さらにここで「(笑)」によってことばを強調している意図が伝わっており、お互いの関係性を深めるもの、そしてその深さを表明するような機能を持つ。

(10) @k***** いやいや喜んでもらえて、おじいちゃん(笑)も本当に嬉しいです。

[#662]

ポジティブポライトネスには、「共通基盤を仮定・喚起・主張する」という戦略があるが、ここでは「内輪である標しを用いる」という戦略が使用され、一歩踏み込んだ共通認識を確認することで、相手のポジティブフェイスへの働きかけを行う。これは、ひとりごとの「嘲笑」として使われることもあるが、これもまた、この嘲笑していることに気づける人、さらに嘲笑している意味が分かる人への働きかけだと言える。

4.5 自然な会話としての問いかけと応答

次に、談話標識として考えられる「(笑)」の具体的な機能について考える。先行研究では、すでに三宅（2005）と久保田（2012）によって、絵文字類の機能には、①句読点の代わりとしてのポーズ、あいづちの機能、②トピック転換、③会話終了部への合図と同意、以上3点が確認されていた。本稿では、本研究で確認された①ターン終了の合図、②ターン初めの合図の2つの機能について考える。

本調査では、複数の文を含むツイートの中での（笑）の出現位置としては、(A) 最初の文の文末、(B) 文頭（「(笑)」のみを含む）、(C) 最終文の文末、(D) 全ての文末の4つの出現パターンが確認された。そのうち、(C) 最終文末の「(笑)」は、①ターンの終わりの合図として機能していると考えられる。その中でも、話の内容のバランスを取る《オチ》と、受信者が反応に困らないように配慮した《語りかけ》の2つのタイプがあると考ええる。

まずは、《オチ》としての機能だが、(11)のように、これは前文である指示対象について良点を述べた後、最終文で悪い点を述べる、など前文と反対の印象を与えることや、発信者自身でツッコミを入れることにより、話の内容のバランスを取り、話の結束（オチ）をつけ、自分のターンを終わらせる使い方がされている。内容自体を緩和させるような役割である。

- (11) 京都の伏見稲荷神社も初めて山頂まで登った 階段続きで途中心折れそうだったけど、登りきった後の達成感はやばかった 二日酔いでコンデション最悪の中で軽い気持ちで登っちゃいけないって思ったわ笑 [#565]

このような用法は、特に、「SP 事前回避」が自虐的な使い方で見られる場合が多かった。各パラメータで「SP 事前回避」、「弁解笑い」に分類されるものが116件確認され、リプライでもひとりごとの使用割合は約半分ずつであった。ネガティブボライトネスストラテジーの選択の方がポジティブよりも優位であった。

次に、《語りかけ》としての機能は、(12)のように、ターンの最後に「(笑)」をつけることで、受信者へ和やかにターンを譲り、円滑なコミュニケーションを行うための役割である。この機能は、「社会的笑い」、「ポジティブボライトネスストラテジー」、「伝達態度の言語形式 (b, c, d)」との結びつきが強く、相手への語りかけとして、友好的な会話を成立させるための最も「phatic なコミュニケーション」だと考えられる。

(12) @k***** 絡む絡む！絡みいくね！笑 [#403]

次に、(A) 最初の文の文末、(B) 文頭に付けられる「(笑)」は、相手の内容を肯定的に受け取り、会話を始める際の標識だと考えられる。特に、「RP 助長」、「ポジティブボライトネストラテジー」、「社会的笑い」との結びつきが強く、(13) のように、共感や相手の文の内容を受けて自分のターンを開始するような使われ方が確認できた。また、(B) 文頭に「(笑)」が現れる場合は必ず、「私も」や「そうなんです」という前の文脈に沿ったツイートが始められていた。「(笑)」のみのツイートも確認されたが、それは相手の話に答えたくない場合、答える必要がない場合には、「(笑)」の後に文章を書かず、「(笑)」だけを発信することで、相槌や微笑みとして表明し、間接的な同意を示唆している可能性がある。

(13) @k***** ほんとにそれ笑 夢の中って自覚あったらもっと色んなことするのに！ [#111]

これは、相手との関係性維持のために、相手のポジティブフェイスを尊重しているというマークになりうるのではないだろうか。ひとりごとよりも、リプライに使用されている数が多いことも特徴的であり、(B) に関しては一つを除いてリプライで使用されていた。「弁解笑い」や「嘲笑」も確認できたが、どれもポジティブボライトネストラテジーとして使用されており、相手と交流を持とうとする働きかけの合図（交話的機能）だと考えられる。相手の (C) 最終文末の「(笑)」を受け取り、同調するように (A) 最初の文で笑い返すことで、会話の流れをつくり、相手との関係性を維持する働きの可能性を考えることができるが、本稿では前後文脈をみるような連続したツイートのやりとりについてのデータがなく、調査していない。そのため、この (A)、(B)、(C) の談話標識としての機能はあくまでも可能性として考えられるものであり、断言することはできない。やりとりの中で「(笑)」の談話標識としての機能が働いているかの検証は、本稿では扱わないが、本稿のコーパスの中だけでも、これまでの例のように、会話ターンの開始合図や終了合図が確認できている。それゆえ、「(笑)」はテキストチャットにおいても、話しことばの疑似会話として自然なやりとりがしやすいような働きを担うと言えるだろう。

4.6 他の表現形式との機能的差異

4.5までで、「(笑)」の持つ社会語用論的機能と談話標識としての機能について、具体的な例と説明を交えて列挙した。ここで一度大きくまとめると、「(笑)」は自他ともにポジティブポライトネスとしての機能が強く、ネガティブポライトネスとしての機能は少なくとも今回収集したデータからはほとんど確認されなかった。しかし、日常会話の中では、自分から相手と距離を取るなど、ネガティブフェイスへ働きかける発話を確認することができる。では、テキストチャットでネガティブフェイスへ働きかけるときは、「(笑)」などのパラ言語特徴を補う視覚表現は使用されないのだろうか。

例えば、(14a) はコーパスで確認された発信者のネガティブフェイスへの働きかけとしての実際のツイートであり、(14b) は (14a) の「(笑)」を泣いている顔文字に変換したものである。

- (14) a. @y***** 画力ないからじゃあ、期待はしないでおいてね？(笑) [#794]
b. @y***** 画力ないからじゃあ、期待はしないでおいてね？(;))

(14a) では文末に笑う表現を挿入することで、「自分に期待しないでほしい」というネガティブフェイスを冗談のように演出し、相手との円満な関係を維持するよう働きかけており、間接的なポジティブポライトネスと受け取ることもできる。一方、(14b) では文末に泣いている顔文字を挿入することで、「自分に期待しないでほしい」という思いの度合いを表現している。受信者は泣いている発信者に対してこれ以上強く期待することができず、結果として発信者は自身のネガティブフェイスを守ることができるだろう。以上のような例から、「(笑)」がポジティブポライトネスに顕著に作用する形式であると同様に、(14b) における (;)) のように、専らネガティブポライトネスを指向する表現形式の存在は十分に想定され则认为てよいだろう。つまり、SNSにおける実際のコミュニケーションにおいては、ネガティブポライトネスの側面が強いものの、ポジティブポライトネスの側面が強いものが複数存在し、発信者たちは巧みに使い分け、自己のアピールや、相手への尊重などを行いながら、円滑なコミュニケーションを築いていると考えられる。

また、文中の使用においても、「(笑)」は意味に含みを持たせることで仲間意識を強調できるが、絵文字が文中に使用される場合は、事物を視覚的に表現する機能を持ち、「(笑)」の機能とは異なる (三宅 2005)。顔文字が文中に出現することを指摘している

研究についても管見の限り見つけられず、同じようなパラ言語特徴を補う絵文字、記号、「(笑)」であっても、その使用法は様々である。久保田(2012)は、絵文字や記号を使用することで「否定的でない」という意思を示唆し、もはや絵文字や記号をつけることは無標であり、絵文字や記号をつけないという選択が有標となると指摘している。確かにその指摘は正しい一面もあると考えられるが、発信者たちは、絵文字、顔文字、記号、「(笑)」の異なる特徴を効果的に使い分けることで、表情の見えないコミュニケーションに感情を込めているのだと考えられる。絵文字類を使い分けることで、「無標」の中でも「有標的」な表現が出来るのではないだろうか。

具体的な感情や事物を指す絵文字や顔文字ではなく、「笑っている」という状況のみを表出させる「(笑)」が使用される理由は、それが具体的な感情を表さないからだろう。今まで見てきたように、ひとつの表記で、複数の笑いを表すことが可能であり、発信者にも受信者にも働きかけることのできるストラテジーを兼ね備えている。これは、「(笑)」が含んでいる意味が多いと言える。たとえ、伝え方が悪く、相手とトラブルに発展しそうになった際でも、具体的な表記である絵文字などではなく、「(笑)」を付けることで、「自分は嘲笑ではなくて、弁解笑いとして使用した。それは誤解だ。」と、実際に嘲笑の意味で発信したとしても、後から意味を訂正し、トラブルを避けることができるだろう。対人関係調整・維持として活躍ができる。

一方で、様々なストラテジーに用いられる「(笑)」であるが、特定のストラテジーのみを「(笑)」で表す使用者もいれば、全ての感情を「(笑)」のみで表現する使用者もあるなど、その使用法には個人差が大きい可能性がある。例えば、本コーパスではポジティブポライトネスとしての使用が多く見られたが、ネガティブポライトネスとしての使用も見られた。普段ポジティブポライトネスのみの使用をする者にとっては、ネガティブポライトネスとして使用する者は必要以上に笑う人のように見え、いい加減な人として認識してしまう恐れもある。「(笑)」は特定の意味を判断するのが難しく、発信者の裏の気持ちを読み取ろうとすると、幾重にも読み取れてしまい、発信者の意図とは違うものが読み取られ、対人関係にひびが入る可能性もある。

絵文字、顔文字、記号、「(笑)」は対人関係の調整・維持としての役割を担うとされているが、その使用法は発信者ごとに異なる。絵文字と「(笑)」を同時使用することで、さらに感情を複雑化させることもできる。本コーパスでは、「(笑)」の類似表現として「www」や「←」という表記も確認できた。パラ言語特徴を補う表現は複数存在し、それらの使い分けや組み合わせには個人差が大きい、その個人差をこだわりとし

て、「自分特有の表現」を生み出し、テキストチャット上でも「自分の話し方」を再現することで、より話しことばに近い会話がテキストチャット上で行えるのではないだろうか。

5. まとめ

本稿では、テキストチャットにおける「(笑)」の持つ「笑っている」という意味情報伝達以外の社会語用論的機能を明らかにすることを目的とした。「(笑)」がテキストコミュニケーションにおいてどのような語用論的働きかけを行っているのかを、実際の Twitter 上の「(笑)」を使用しているツイートをデータとして扱い、①ボライトネス戦略としての機能、②言語形式との対応、③笑いの種類、④談話標識としての機能、の4つの側面から分析した。その結果、「(笑)」は全体的にポジティブフェイスに作用する機能を持ち合わせ、対人関係の維持に効果を与えていることがわかった。また、具体的な機能としては、《相手のポジティブフェイスを尊重する機能》、《自己のポジティブフェイスが脅かされることを事前に回避し、ポジティブフェイス（の一部）としての理性的な自分を主張する機能》、《仲間意識の表明の機能》の3つが挙げられる。さらに、自然な会話となるような談話標識として、《ターン終了時のオチ・語りかけ機能》、《ターン始めの応答機能》の2つの機能を有している可能性も見出すことができた。（また「(笑)」の典型的な使用文脈としては、会話を繋げ、対人関係の調整をはかる交話的機能を指向するとともに、ボライトネスの観点からは主として自己のポジティブフェイスの操作に関与する傾向が明らかになった。）

一口に「(笑)」といえども、「(笑)」が表す笑いの種類は複数あり、ポジティブボライトネスとしての機能の中でも複数の戦略に用いられうることが確認された。しかし、複数の戦略を持つ「(笑)」の使用により、対人関係の調整・維持に良い効果を生むこともあれば、発信者の意図と受信者の読み取りのズレにより、誤解が起きてしまう可能性もある。

「(笑)」がポジティブボライトネスに関与する形式であるという本研究の成果を踏まえれば、ネガティブフェイスの操作に関与する表現形式が今後のリサーチクエスションとなる。そのような機能は、例えば本研究の対象とはしなかった顔文字形式（(⌒) など）が担っている可能性が考えられる。さらに、本稿では Twitter のデータを対象としたが、より発信者と受信者の関係性が身近だと考えられる LINE や、より関係性がパブリックなものと考えられる Facebook など、対象とする SNS が異なれば、テキスト

チャット上の絵文字使用にも差が表れるだろう。また、同じ SNS であっても、年齢や性別などの使用者の特徴によって好まれる絵文字などにも違いが生じうると考えられる。本稿で明らかになったポジティブポライトネスストラテジーとしての「(笑)」に関する知見をふまえ、ネガティブフェイスに作用する形式を含む SNS におけるパラ言語的形式による包括的な社会語用論的機能の解明は、メディアと言語に関する今後の重要な研究課題となるであろう。

参考文献

- Giles, H. & Oxford, G. S. (1970) Towards a multidimensional theory of laughter causation and its social implications. *Bulletin of the British Psychological Society*, 23, 97-105.
- Leech, G. (1983) *Principle of Pragmatics*. London: Longman.
- Leech, G. (2014) *The Pragmatics of Politeness*. New York: Oxford University Press.
- Schnoebelen, T. (2012) Do You Smile with Your Nose? Stylistic Variation in Twitter Emoticons. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*, 18, 2, 115-125.
- 久保田ひろい (2012)「絵文字は何を伝えるか—携帯メールにおける絵文字のパラ言語的機能とテキストの構造化—」『認知言語学論考』10号 pp.143-192 ひつじ書房
- 高本條治 (1993)「パソコン通信におけるフェイスマークの機能」『日本語学』12巻12号 pp.63-74 明治書院
- 滝浦真人 (2008)『ポライトネス入門』研究社
- 鳥海不二夫 (2015)「Twitter 上のビッグデータ収集と分析」『組織科学』48巻4号 pp.47-59
- ニコニコ大百科「w とは」< <https://dic.nicovideo.jp/a/w> > 2020年11月13日閲覧
- 日本語記述文法研究会編 (2003)『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- ブラウン, ペネロピ & レヴィンソン, スティーブン・C. 著、田中典子監訳、斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳 (1987/2011)『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』研究社
- 三宅和子 (2005)「携帯メールの話しことばと書きことば—電子メディア時代のヴィジュアル・コミュニケーション—」『メディアとことば』2巻 pp.234-263 ひつじ書房
- ヤーコプソン, ロマーン著、川本茂雄他監訳、田村すゝ子・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子訳 (1973/2019)『一般言語学』みすず書房